

第5回市史講座ミニレポート：平成27年8月30日（日）

「城郭から見た堀尾氏の出雲支配」

講師：中井均先生（滋賀県立大学人間文化学部教授）



中井均先生ははじめに、全国のお城が面白いという話をされました。姫路城の5年半におよぶ修理が完成したことや、天空の城「但馬竹田城」には年間50万人が登城しており、かつては山上まで車で登れたが、現在は規制されている程の賑わいであることなど、城郭に多くの見学者が訪れていることを紹介されました。これらを踏まえ、松江城がこの7月に国宝指定され「国宝5城」となったことの祝いを述べられ、本題に入られました。

まず堀尾氏の出雲入国時の状況として、戦国時代最大の軍事的緊張が築城ラッシュを招いたことを指摘されました。その背景には、関ヶ原合戦での戦後処理による大名の入れ替えと、徳川氏と豊臣氏の最終戦争

（慶長20年に大坂の陣で現実化）に備えた国境警備（境目）などの目的があり、極めて軍事性の高い城郭の築城に至ったことを述べられました。また、県内の中世城館は約1,000ヶ所にのぼることが分布調査で分かっていますが、大半が土造りの戦国時代の城館である一方、新しく築かれた城は石垣を伴い、虎口に枡形を採用した構造の織豊系城郭であることを説明されました。

次に、松江城築城以前の月山富田城と、出雲・隠岐の諸城について取り上げられました。富田城については、山頂部の石垣は裏込石を用いていない石築であり、戦国時代の工法を用いているそうです。一方、山麓部の「山中御殿」には、裏込石を用いた石垣を使用していますが、この石垣は毛利領東限の諸城（岡山県内）にも見られ、毛利氏段階で築かれたそうです。堀尾氏はこの山中御殿に入城したそうです。

また、古くから尼子氏の居館跡とされた「里御殿」からも石垣が検出されたことから、ここも堀尾氏段階で改修を受けたとされています。このことから、富田城では当主の忠氏が「山中御殿」に、隠居の吉晴が「里御殿」に館を構えるという「一城二館構造」であり、これは筑前の黒田氏にも見られた曲輪の利用方法だそうです。さらにこの構造は松江城の本丸と北丸に引き継がれたことを指摘されました。また、城内の「親子観音」から、重臣の堀尾河内守が配されて墓所が整備されたことが分かり、松江に本城が移動した後も富田城が支城として用いられたことが分かります。

次に、三刀屋城（雲南市）と赤名瀬戸山城（飯南町）を、それぞれの領内での位置、曲輪の特徴、石垣の技法・材料から説明されました。三刀屋城では、石垣と礎石建物および天守相当の櫓が建設されていたことが分かりましたが、瓦の出土が見られないそうです。

瀬戸山城では、主要部に石垣が使用され、発掘調査がなされておらず不明な部分もあるのですが、主要曲輪に穴蔵を用いた櫓が設置されていたのではと指摘されました。また、支城の山麓部には支城主として配置された重臣の墓所も置かれたことが分かっています。

織豊系城郭の特徴である石垣・礎石建物・瓦の使用という要素のうち、瓦の使用がなされていないことについて、中井先生は本・支城体制の差ではないかと言われました。

さらに隠岐での調査で、戦国時代の土造りの城しかみられないことから、堀尾氏は重臣を派遣せず、代官クラスの家臣を送っていたことが考えられるとのことでした。

ほかに絵図・文献から分かる支城が、三沢城と亀嵩城（共に奥出雲町）です。三沢城では石垣が山麓部に見られますが、やや古い石積構造であり、重臣の墓所も設置されていません。また亀嵩城は、雪の降る中の調査で編集室職員が道に迷うなど、中井先生にとって十指に入る難調査であったそうですが、山頂の城は戦国期の土造りの城で、近世の改修を受けた痕跡はみられなかったそうです。

絵図には富田・三刀屋・瀬戸山と亀嵩が「古城」と表記されていますが、中井先生はこれまでの研究から、元和年間までに機能した城を指すのでは、と指摘され、仁多郡の支城にはまだまだ不明な点があると述べられました。これらの支城は、元和の一国一城令での城割（破城）を受けており、石垣が崩されるなどの処置が施されていました。

これらの諸城から、堀尾氏は旧城に一旦入城し、新城の候補地を選定するとともに境目や要衝に支城を築くなど、安芸の福島氏、筑前の黒田氏と同様に、本・支城体制で領国支配を徹底化したことが明らかになる、と結論づけられました。